

我が街の 記念碑

モノユメント
46

大山道旅人の像

東急田園線
都心駅
徒歩11分



【世田谷・書記・近藤日登美通信員】東急田園都市線「桜新町」駅から800m、東急バス弦巻営業所から160mの世田谷区弦巻4丁目にある「大山道児童公園」。砂場と滑り台がある小さめの公園。一般的公園ですが、その入り口で「大山道旅人の像」が一服しながら出迎えてくれます。江戸時代中期、関東一円の農村では雨乞いのため、雨降り山とよばれる丹沢の大山に参詣する習慣がありました。これを大山詣といい、江戸の赤坂を起点として、青山、世田谷区では、大山道や沿道の今昔を楽しみながら、街の歴史を学び、健康増進にも活用してもらおうと大山道マップやすごろくを作成して区のホームページで公開しています。



一服しながら出迎えてくれる

小さめの公園の一角に 脱力系の不思議な像

田谷、二子、溝ノ口、長津田、伊勢原を経て大山に至るこの道は、俗に大山道と呼ばれ、葛飾北斎や歌川広重にも描かれ、古典落語にも登場するなど、歴史ある道です。世田谷区では、大山道や沿道の今昔を楽しみながら、街の歴史を学び、健康増進にも活用してもらおうと大山道マップやすごろくを作成して区のホームページで公開しています。

この像は昭和60年3月に公園を開設した際、そんな大山詣をする商家の主人をモデルに、たぶん一服しただろうと思われるこの場所に設置されました。「なぜ公園にこんな像が」と初めて目にした時は驚きましたが、興味をもったことで由来を知ることができました。なんとも言えず力のかけたこの姿は、歴史を伝えるつも住民に気持ちの安らぎを与えてくれる不思議な存在となっています。



忘れえぬこと

蘇る亡き父の言葉

大工事務 大竹 百合子



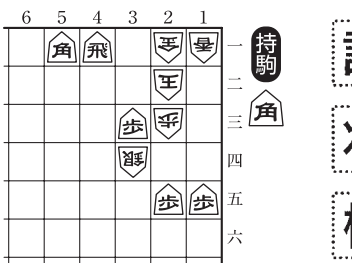
6年前の安楽死法の強行採決。父の言葉「戦争をしてはならない」が蘇りました。記憶の中の父は、無口で怖い人。小さい弟がやんちゃで、悪いことをすれば庭にあった松の木に縛られて、大泣きしたことを思い出します。でも、

者であり、「松下村塾」において明治維新で活躍する多くの志士を育て上げた。21歳の時、松陰は長州藩から脱藩したことで、士籍剥奪・世禄没収の処分を受けてしまう。最悪死罪にな

17の頃、世間は60年安保となり、国会での強行採決、樺さんが亡くなり、大きな騒動となつて「恐ろしいなあ」と、当時の記事を読んだことを覚えています。そして、父が怖い形相で「何やってるんだ」「戦争は2度としてはならないんだ」と吐き捨てるように言っていたことが、深く胸に残りました。

40年前に病気で他界した父。昭和13年から朝鮮配属、その数年後、私が生後6カ月の頃、満州へ従軍、その間、何度手紙で私の写真を送っても届くことは無かったそうです。この間、母は農作業をしながら私を育て、何年も帰れなことを祈りつつ待ち続けたとのことでした。

詰将棋



毎日新聞社記者の東海林智さんから、コロナ禍で仕事を失った労働者が特殊詐欺に手を染めているとの話を聞いた。「高収入」「即金」という触れ込みでサイト上の「闇の職安」にたどり着き、「受け子」「出し子」といった「仕事」を請負うのだという。



9人の翻訳家 囚われたベストセラー

レジス・ロワンサル 監督

有名小説出版エピソードが題材に

物語は、フランスの人里離れた村にある洋館の地下室に、9カ国の翻訳家が集められるところから始まる。待望のミステリー小説『デダリウス』完結編を世界同時発売するためだ。電話やSNSなどの通信も禁止され、外部との接触を断たれた9人は、毎日20ページだけ渡される原稿の翻訳作業にこしむ。ある夜、出版社の社長のもとに『デダリウス』冒頭10ページをネットに公開したというメールが届く。そこには「24時間以内に500万ユーロを支払わなければ、次の100ページも公開する。拒めば、全ページを流出させる」と



「受け子」などの顔写真を近隣の事件も含めて一斉公開した。最近、そのうちの一人が逮捕された。犯罪の素人だから素顔を無防備に防犯カメラにさらしたのだらう。去年の7月の事件だ。彼もまたコロナ禍の追い打ちを受けて詐欺の片棒を担いでしまったのだらうか。